

氏 名：小竹 久美子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲第 198 号

学位授与年月日：2021 年 3 月 10 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 審 査 委 員：主査 鈴木 美穂（聖路加国際大学教授）

副査 木下 康仁（聖路加国際大学特命教授）

副査 大久保 暢子（聖路加国際大学准教授）

副査 福島 啓文（がん研究会有明病院 頭頸科医長）

論 文 題 目：在宅療養移行期にある退院 3 ヶ月後の喉頭摘出者の生活のプロセス

博士論文審査結果

本研究は、学生自身が研究代表者を担う実施中のランダム化比較試験(RCT)で得られた質的データの二次解析により、先行研究から QOL が低下するとされている喉頭摘出術後患者の退院 3 か月後の在宅生活に何が起きているのか、身体的変化と心理社会的変化が日常生活にどのような影響を及ぼしているかを明らかにしようとする質的研究である。3 名を対象とした予備研究の結果をもとに、本研究では新たに 4 名を対象に分析している。

本研究の論文審査会は 2020 年 12 月 23 日に Web 会議方式で実施された。M-GTA を用いて喉頭摘出者の在宅での生活の変化と QOL 概念の関係構造を探索できていることは認めるものの、分析結果と考察の記述に改善の余地があるとして、主に次の点に修正を求めた。

- 1) 予備研究や本体研究である RCT を通して探求している、喉頭摘出患者の生活に関する研究の全体において、本研究がどう位置づくのかを明確に記述すること。
- 2) 結果と考察が重複しているので、考察では本研究で分かった知見をまとめること。
- 3) 結果にデータから具体例をていねいに記述するなどして、分析結果の厳密性を高めること。
- 4) サンプルングや分析方法は方法論用語に依存せず、実際にどう行ったかを記述すること。
- 5) 対象者リクルートやデータに制約があった事実を記述し、限界として考察すること。

2021 年 2 月 14 日に提出された修正論文において、上記の点に関して適切に修正されていることを審査員で確認した。

本研究結果の中核カテゴリーは身体への「変化する違和感」であり、これは味覚・嗅覚の消失などの「続く違和感」と、のどのつかえや鼻への逆流、永久気管孔閉塞の不安による「死の恐怖との闘い」など「強くなる違和感」の二つのカテゴリーから構成され、患者は困難な中で食べる工夫、息苦しさへの工夫などできることを模索し「生きようと(する)試み」る。そして、声の喪失に適応しながら「障害とともに暮らす」人生を考えるようになる。しかし、「変化する違和感」により思うようにいかない現実に戻されるというシーソーのような変化を経験しており、家族の支えとその状況にあってもなおできることを模索する生活をしている。本研究の独自性は退院後3か月後の当事者の複雑で不安定な経験を、筆談を主とする限られたデータの詳細な分析から明らかにした点にある。

以上により、本論文は、本学学位規程第5条に定める博士(看護学)の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。